

有名な」

「海岸？」

ソリーがいぶかし気に聞き返します。

「太古は山の中言うてたけどな」

「そりや山もあるさ。一ノ谷合戦の古戦場だからな。源

義経のひよどり越え知っているだろう」

「知らん」

「何だ、知らんのか。馬も四ツ足、鹿も四ツ足って有名な話だぞ」

一ノ谷合戦や、ひよどり越えの話をしようと思いましたが面倒臭くなってやめました。

橋がありました。らんかんのついた橋の向うに大きな鳥居があって、それはまるで、こちらが神社である証明のようでした。その鳥居の両脇には大きな布袋像が一つづつあるのです。

私にはそれだけでも奇妙な取合せに見えるのに、頭を巡らすと、ふつうは神社にはなくて寺院にだけある鐘つき堂が、でんとひかえているのです。

そうした景色、あるいは、たった今引いたばかりのおみくじを熱心に読みながら歩く母娘連れの表情の方が、その時の私にはひよどり越えの義経や、畠山重忠の武勇談よりも興味があつたのです。

それにしても、この奇妙な取合せの風景、いわば神仙同居ごちゃ混ぜの調和は、私の中では、七福神の日本、中国、印度のボヘミアンの結合（なんてキザな言い方ですが）宝船の雑居に結びつき、それから更に平山飯場は日曜同居と、歌の文句でも思ひ出すように結びついて行くのはこじつけてしょうか。

神仙同居をさらりと受け入れ、うたがわなない庶民感覚というものがあつたのなら、日曜同居もさらりと受け容れる感覚もある筈で、いいえ、あるとかないとかでなく、感覚などと改まるのでもなく、それはすっかり日常の中にすっぽり溶けこんでいる事実で、そこに民族差別なんてものがあつて在りようもないのではないのでしょうか。

喧嘩、反目、いがみ合い、へつらい、つけ口、憎悪、友情、たすけあい、利己主義、無関心、陰謀。飯場にそういういろいろなものがないとは言いません。

人間のすむ場所には、どこにだってそういうものがあるという程度には、土工飯場にもそういう周波はあります。

しかし、それは初めに日本人だからどうこう、朝鮮人だからどうこうという前置きがあつて何かが起るのではありません。

あるとすれば、何かがあつた後で、事件の解釈に因つ

を上気難にしました。

平山飯場とかぎらず、私たち土方社会にはそういうものはない。それは飯場に限らず、遍いの土方も、釜ヶ崎、山谷に居る仲間もみな同じだ——そう考えることで、私はとても幸福な気分でした。

何——何故なら私たち全体が、その外側の世間から白い眼で見られ、差別されているからだ——と、いとも単純明快に思うのです。

だが、しかし、ひょっとすると、余りに単純すぎて、何かを見落しているかもしれないとも、かすかに思うのです。

私はそぞっかしい性格だから、ふと思いついた考えに有頂点天になって、五目並べにたとえれば、自分の四・三をつくるのに夢中になって、相手の四・四に気がつかないようなところがあります。

今度もそれではないか、間違つてはいないいつもの結論に、何か欠点があるかもしれない、という疑惑が隅の方からひろがってくるのです。

しかし、私はそれ以上、私自身の疑惑の影を追うことが出来ませんでした。

その時、大輪の花がゆらりと動いて、私の目を奪ったからです。

平山飯場には民族差別はない——という考えは私自身



誰れもいないと思つた木立ちと回廊の間から現われた二輪の花が、まるで妖精のように歩み寄つて来て、不意をつかれた私は、その瞬間に、何を考えていたのか忘れてしまいました。

思いがけない所から人が出て来て驚き、さらにそれがまた二人連れの美人だったのであつたのだ、と言つた方が正確でしょう。

大輪の花だの、妖精だのというのは、気障でもあるし、大げさでもあります。けれどもその瞬間の感じは、そう見えたのです。

二人連れは母娘のようでした。

と言つても先ほどのおみくじの母娘連れとは違います。目の前の母娘は、二人ながら色白で、すらりと背が高く、脂ぎ上ったような品があつて、それが何やら、ひそひそとささやくように話しながら、さりすぎようとしてゐるのです。

急いでシャッターを切りました。ピントも何もありません。そんなことを考えていたら間に合わないのです。

母娘は私のカメラに気づかず、そのまま行きすぎました。私はもう一度、その姿勢にレンズで追いましたが、今度にはシャッターは切りませんでした。

ファインダーから目を放し、ため息をつきました。東

「何か面白い映画やつてるのかな」

「さア」

それきり二人は黙りこみ、あてもなく境内をぶらぶら歩きました。

私はもう、この満荒神で写真を撮る興味をなくしてしまいました。

フィルムはまだ残っています。カメラにセットしたのと、他にシヨルダーバッグの中にも新しいのが二本も。

せつかく出て来たのに、これだけでは物足りない気がするし、

「そうだ、宝塚へ行こう」

「どこでもいいきに」

ソリーがぼそりと答えました。彼の顔はいつも喜怒哀楽がはつきりしません。

「あそこには少女歌劇の劇場がある。グリーンのはかまの女優にあえるかもしれないぜ。それにファミリーランドだ。ジェットコースターとか、いろんなものがある。写真を撮るには絶好だ」

ソリーの表情が、わずかながら動いたのを私は見逃しませんでした。が、それ、ツカジェンヌにあえるかもしれない。待のためののか、それともジェットコースターのためののかは判りませんでした。

の間の緊張から解放されたため息か、今のはピンボケかもしれないという無念さのため息か、私にも判りません。

ふつ、とソリーと目があいました。心なしかソリーのまくれあがつた唇に、からかいとも、冷やかしのもしれ薄笑いが一瞬浮かんで消えたように見えました。

私はまた狼狽しました。

つい今しがたまで、何やらこむずかしいことを頭の中でひねくり廻していたのに、美人を見るともう忘れて、あわてふためき目尻を下けている——そんな内心を見すかされた気がして、照れかくしにヘラヘラ笑いました。それでもたりに、その場をごまかすように、言いました。

「太古ちゃんは今日は何処へ行ったのかな」

別に太古の行き先を知りたかつたのではなぬのです。何か言わないと落ち着かなかつたというにすぎません。

「映画に行く言うとったけん、厄に行つたんやろ。清水さんや、浜地と朝から出て行きよったきに」

「薩土連合だ。桂小五郎が足りねえな」

私私はつまらぬ冗談を言いました。清水は鹿児島県(薩摩)出身で、太古と浜地は高知県(土佐)出身です。ソリーにはしかし、この冗談は通じなかつたようです。

私たちは急いで参道を下りました。

宝塚は、満荒神の次の駅で、電車の終点でもあります。つまり、すぐそこなのです。

それにしても、私はこの若くて好人物の友人に感謝しなければなりません。

まったく私ときたら、長い間欲しがっていたオモチャを、やつと買ってもらつた子供と同じで、カメラに夢中な上に、次々と思いつくままに歩き廻るのを、彼は助手役を引き受けて、不平も言わずについて来てくれるのですから。

他の人では、こうはいきません。

たとえば清水は気まぐれで、気が向けば同行してくれますが、約束をすつぽかすことも多いのです。

浜地は写真に興味がないようです。

少年らしい神経質で、照れ屋の太古はお話になりません。

太古は、浜地と同じ村の出身で、池田とはとより村ですが、平山飯場では最年少の十八才、いや十九才になったでしょうか。

今でもそうですが、飯場に来たばかりの二年前は、細い体つきに幼なさが残っていましたし、小さい顔も子供っぽくて、土工飯場の荒くれ男の中に目にははいりませんでした。



じすぎる少年なのでした。

実際にはそれほどでもないのですが、見た目には同じ年頃の少年とくらべても弱々しく見えるので、松本姐御や、平山姐御は、ひろってきた子犬のように可愛がります。

ところが、本人はそれに甘えながらも、何かにつけ子供扱いされ、同情されるのが、気に入らぬようでした。

男の子らしい意地がそうさせるのです。

しかし、それだけではありません。

「太古ちゃん」

と呼ばれるのが嫌いなのです。

バレーだか、バスケだかのオリンピック選手に「太古」という人がいましたが、あれは「オウコ」と読むのに、平山姐御の少年の場合は「タコ」なのです。

ニキビ盛りの男の子にとって

「タコちゃん」

と呼ばれるのは嫌いを通りこして屈辱的なことに感じありません。

まして、若い女の子の前などでは、身を切られるような思いがするでしょう。箸がころけても……という年の娘は笑いこけるかもしれません。

いや、太古はそういう場面に出会った経験が何回もあるのです。

るのです。

或る日、思いつめた顔で、私に話しかけました。

「飯場の中では仕方ないけど、外へ出たら名前を呼ばんようにして下さい」

「うーむ、気持ちちはよく判る。しかし余無しのゴン兵衛でも困るだろう」

「そりゃアそうだけど」

「何て呼んで欲しい？ 君の好きな名前と呼んであげよう。加山雄三か、勝新太郎か、それとも高倉健か」

「……」

「ハハハ、怒るなヨ。冗談じゃないか。それじゃアこうしようか。苗字でなくて名前と呼ぼう。正彦とか、マーちゃんとか。それでいいだろう」

太古は黙って肯きました。それでいいというより、仕方がないというように見えました。

どうやらこの少年は、自分の姓を屈辱的と思うばかりでなく、名前をあまり気に入っていないようでした。

しかし、私だけが気をつけても、他の者はそこまで気を配ってはいけません。

「タコをタコと呼んでどこが悪い。タコがいやなら、イカと呼ぶのか」

と言われたり

工商の身分制が崩れました。

天皇の政府は、廢藩置縣を始め、廢刀令、散髪令と次々に法令を発しました。

そうした中で、平民にも苗字が許されることになったのです。

それは

「国民はすべて苗字を持たねばならぬ」

というような強制的な命令ではなく

「これから誰でも苗字を持ってもかまわないのだよ」という程度のお達しだったのかもしれませんが、どちら

であったにせよ、一般平民はお上の御意向に弱いのです。それに今までは一種の特権であり、平民にはあこがれた苗字を許されるというのですから、我れも我れもと

役所へ殺到しました。

中には「徳川」とか「豊臣」などという苗字を掲げて、役所で叱られた者もいたそうです。

しかしながら、困ったことに当時は、読み書きを知らぬ人が多いものですから、自分の苗字をどうつけたものやら皆目見当が付きません。

せっかくのおふれも有難いやら迷惑やら、痛いやら、くすぐったいやら。

そこで、そういう連中の中の一人が

逆に言えば苗字を名乗ることは、封建制下での家柄を

保障するステータスであり、特権であつたわけです。

ですから、何かの功労があつて、そこらの商人か、民が苗字を許されたりすると、これはもう大変な名誉で、現代にたとえれば文化勲章でも貰つたような、あるいはそれ以上の……。

ところが、徳川幕府が倒れ、明治の世になると、士が